幢は忿顔ばせを現口より鉄の鋒を吐て罪人を縛執して。前世の罪業を白狀すること。明にして隱なし。此時に琰魔王。人頭幢の白狀にまかせて。罪人を執て。八寒八熱一百三十六の。地獄に墮れば。おのれが罪業をば顧す。唯人頭幢を恨るなり。此時に地藏の悲願力をもって。人頭幢を執て。舌を卷口を閉て語せずして。白狀をやめさするを。檀陀地藏となづくるとなり。扨地藏本願經に。佛普賢菩薩に告て娑婆世界一切衆生。惡業の報ひの咎の輕重に依て。地獄の名も。さま〳〵に有ことなり」12オ此地藏は惣じて。現在の利生は。男女愛敬を守て。子のなき女人には。子をあたへて。平産を守。難産の人をすくひ給ふなり。さて六道輪廻の業を除。一切の諸願をかなへて。無上菩提にいたらしめんとなり。地藏本願經延命經十輪經等を。見たまふべし。利益は地藏霊驗記。利益集。書物沢山に出生セり地獄の歌とて新續古今に

つくりこし罪を友にてしる人もなく〳〵
こゆるしての山道　　二條院宣旨

夫木集
ひとつ身をあまたにかせの吹きりて
ほむらになすぞかなしかりけり　　西行法師

第七　瑞泰寺地藏腰抜本復之事」12ウ

駒込瑞泰寺此地藏尊は。感應ます〳〵爰に。淺草橋の外に或國大名の家中に。中根氏何某の息女。十五歳になるまで。生得として。腰抜たつことを得ざれば。父母常に是を悲。彼女子四五歳の時分より。百醫をつくすに。其功なければ。さては藥力にては治し難し。此上は佛神の冥助を。頼ずんば本復すべからずとて。まづ淺草觀音へ。代參をもって。一七日を限として。日參させて祈誓するに。其甲斐なければ。また神田の明神ゑ一七日を限として。代參をたつるに。其驗なし。また其後龜井户の天神へ。一七日代參をたつるに。其感應なければ。其時父母これこそ業病にて。佛神の威力にも叶はずとて。元禄五年の春まで。」13オうち捨置たり。此年二月の頃。父駒込瑞泰寺の門前を通りけるに彼寺より。法師三人伴。中根氏の前に立て。行ながら。一僧語けるは。諸佛菩薩の中には。地藏菩薩ほど。利益深き夏はなし。此頃の事なるに。近所の去腰抜。瑞泰寺の地藏菩薩の。霊ある事を聞て。一七日を限として。立願して祈るに。其儘平復したると語れバ。餘の二人の僧のいはく。されば彼地藏尊へ諸願を祈に。一として成就せずと。云事なしと語行を。中根氏つく〴〵と聞。夫より屋敷にかへり。娘を乗物にのせて。父同道して瑞泰寺へ參詣し。香華燈明を尊像に。供養し奉。一心に立願し。父娘ともに一日に。地藏尊の名号を百遍宛唱。一七日を限と」13ウして。日參するに。不思議なるかな。早二日めより足少宛。立しかば。父母大きに隨喜して。いよ〳〵單信無二に。日參するに。一七日目には透と本復し。息女歩て參詣し。所願成就したる　となり

第八　六地藏二番之像利生之事

駒込千駄木林にて。浄土宗一心山專念寺の。寶珠地藏は餓鬼道の能化にて。如意を持たまふ。餓鬼道の衆生の。前生慳貪の罪に依。五百歳經ども飲食の。名を聞叉もなし。おのれが惱を摧き散。自の子を取て。食して飢を暫も息るとなり。此ごとくに。今日娑婆にても。人々我子を賣て。その金銀をもって。身命をつなぐこと目前にあり。さて此時に如意宝」14オ珠より。餓鬼道の衆生の。好所の種子の。飲食を食して。怒飽滿すること。如意宝珠のごとし。扨一切の食物のとぼしきものに冨貴をあたへたまふ事なり。又かくの煩の人。立願をかくれば。本復するとの事なり。又賣買の人には。その品々の望を。かなへ給ふとのことなり。惣じて六地

藏は・衆生二世の所求を・悉成就せずんは・正覚をとらじとなり・延命経本願経釈文のごとくなり・餓鬼道のうたとて・新續古今に

すずしやと・かわせのなミに・立よれば
もゆるおもひの・ミづからぞうき　前大僧正道玄

月清集に
身をせむる・うへのこゝろに・たへかねて・子を
おもふ道ぞわすれはてぬる　後京極摂政」14ウ

第九　六地藏三番之像利生之事

谷中の新堀村・諏訪の社真言宗・宝林山浄光寺の・地藏ハ寶印地藏と申なり・此地藏は輪宝と・花鬘を持たまふなり・畜生道の・苦を助たまふなり・畜生の互に・殘害の苦を抜て・微妙清浄の・飲食をあたへて・各に實相甘露の・法味を含たまふとなり・一切の畜生の苦を抜て・樂をあたへたまふなり・扨また人間界にては・子そだてなき人・此尊に立願あるべし・此地藏を信心する人は・盗賊の厄難をのがれ・他國に出ては・山河の難・諸の横難を・のがるゝとなり・一切毒のむし・蛇などに障なし・萬の畜生に・痛られぬとなり・延命経のごとく・山神木神・江海水神・蛇神路神等は・地藏信心の」15オ衆生をば・守護あるゆへなり・狐狸にも・化されぬとの・ことなり・さて畜生道のうたとて・山家集に

かぐらうた・草とりかふは・よけれども
なをその駒に・なることはうし　西行法師

月清集に
水にすミ・雲井にかける・こゝろにも
うき世のあみは・いかゞかなしき　後京極摂政

第十　六地藏靈驗之事

第三番目の・地藏菩薩に・御籠町に・八木氏何某とて・眼病を煩て・此地藏に毎日參詣して・念佛を。我盛力の盡程申外には・別の粮生はなし・初は子に手をひかれて・二三十日は參詣もうせしが。後には杖ばかりにて・一人宛」15ウまいり念佛して・漸々に両眼明になりて・百日の内に。元のごとくに・本復して其御礼とて・假名實名上げるなり地藏堂に見けるなり・さて六ヶ寺の寺方に・誰とりとめて・地藏の霊驗を感じて・しる人もなきゆへに・よの六躰にも・其數あるといへども・慥に其意趣を知難・聞およびにまかセ・粗かき記をく所に・未の年類火に焼失セり・地藏不信心の故とせり

第十一　六地藏四番之像利生之事

下谷池の端萱町・浄土宗影向山心行寺は・持地地藏と申なり。修羅道の能化たり・幡と御経を持たまふ・扨修羅ハ地にすむ。帝釈は天にあつて・毎月十六日辰のとき・決定して・」16オ帝釈と・修羅と合戦あるに・修羅毎度軍に屓て・ひき退・闘諍の楯・大海の底に落るに・天の雷の鳴がごとくなれば・帝釈は軍鼓を・聞たまひて・肝を消魂を失て・苦患無量なり・此ときに・持地地藏は・大地を持て・修羅の合戦の・城郭を警固したまふ・其時阿修羅宮は安穏となりて・闘諍の苦患を脱するを・持地地藏となづくとなり。惣じて人間の・嗔恚ほのふを消滅し・横死横難・時のはやり病を除・また菩提心を増進したまへて・男女一切の・病消滅したまふとなり・修羅の歌とて・拾玉集に

須弥の上は・めでたき山と。聞しかど・
しゆらの軍ぞ・なをさはがしき　慈鎮和尚」16ウ

月清集に
浪たてし・心の道の・すへはまた
くるしき海の・そこにすむかな　後京極摂政